

Chapter 6

Mandelbrot 集合に関する結果 —Theorem B, D の証明

5章では Julia 集合に関する結果を証明した. この章ではこれらの結果を用いて parameter space における局所連結性 (Theorem B) と測度に関する結果 (Theorem D) を証明する. そのために §6.1 では $c \in (\text{PR})_M$ または $(\text{IR})_M$ の場合の Theorem B の証明に必要な Comparison Theorem を予め証明しておく. これは $c = c_0$ に対する dynamical plane の partition から定義される $z = c_0$ の周りの annuli の列と, 後に定義する, parameter plane に対する partition から定義される $c = c_0$ の周りの annuli の列について, それらの modulus の比が一様に有界であることを主張する. $c \in (\text{PR})_M$ または $(\text{IR})_M$ の場合の Theorem B の証明はこの定理からただちに従う. Theorem B のすべての証明は §6.2 で述べる. また §6.3 では Theorem D を証明する.

6.1 Comparison Theorem (z -plane \longleftrightarrow c -plane)

$c_0 \in M$ で f_{c_0} は (1 回も) くりこみ可能でなく, (APR) を満たす (即ち, すべての周期点は反発的である) とする. そこで f_{c_0} に対応する M の Yoccoz partition を構成し, c_0 を含む puzzle piece の列 $\{P_n^M(c_0)\}_{n=0}^\infty$ を構成する. ただし, 厳密には M の partition ではなく $c_0 \in W_{\frac{p}{q}}$ となる $\frac{p}{q}$ -wake と呼ばれる, parameter space の部分集合 $W_{\frac{p}{q}}$ をとり, これに対して partition を構成する.

f_{c_0} の α -不動点の combinatorial rotation number を $\frac{p}{q}$ とする. なお以後, z -plane における external ray $\mathcal{R}(\theta, K_c)$ を $\mathcal{R}^c(\theta)$, また parameter space における external ray $\mathcal{R}(\theta, M)$ を $\mathcal{R}^M(\theta)$ と書くことにする.

Lemma 6.1.1 [Mi3, p.3, Theorem 1.1, 1.2]. $\frac{p}{q} \in (0, 1)$ とする.

(1) $\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1} \in \mathbb{R}/\mathbb{Z}$ で

$$2\theta_i \equiv \theta_{i+1} \pmod{1}, \quad (\theta_q = \theta_0)$$

を満たし, \mathbb{R}/\mathbb{Z} 上の $\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1}$ の配置が rotation number $\frac{p}{q}$ を持つものが存在する.

この軌道は一意的であり, $\mathbb{R}/\mathbb{Z} \setminus \{\theta_0, \theta_1, \dots, \theta_{q-1}\}$ は最小の長さの区間をただ1つ持つ. それを (θ_-, θ_+) とする.

(2)

$$W_{\frac{p}{q}} := \left\{ c \in \mathcal{M} \mid \begin{array}{l} \mathcal{R}^c(\theta_-) \text{ と } \mathcal{R}^c(\theta_+) \text{ が途中で break up せず potential } 0 \\ \text{まで存在し, 共通の repelling fixed point } \alpha_c \text{ に land する} \end{array} \right\}$$

とする. $c \in W_{\frac{p}{q}}$ のとき $z = c$ は $\mathcal{R}^c(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^c(\theta_+)$ で区切られる sector に含まれる (Figure 6.1 (i)). また

$$\partial W_{\frac{p}{q}} = \mathcal{R}^M(\theta_-) \cup \mathcal{R}^M(\theta_+) \cup \{c_{\frac{p}{q}}\}$$

が成立する (Figure 6.1 (ii)). ただし $c_{\frac{p}{q}}$ は $\mathcal{R}^M(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^M(\theta_+)$ の共通の landing point であり, $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_+)$ は共通の parabolic fixed point に land する. 更に $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_-)$ と $\mathcal{R}^{c_{\frac{p}{q}}}(\theta_+)$ は $c_{\frac{p}{q}}$ を含む parabolic basin に隣接している (Figure 6.1 (iii)). \square

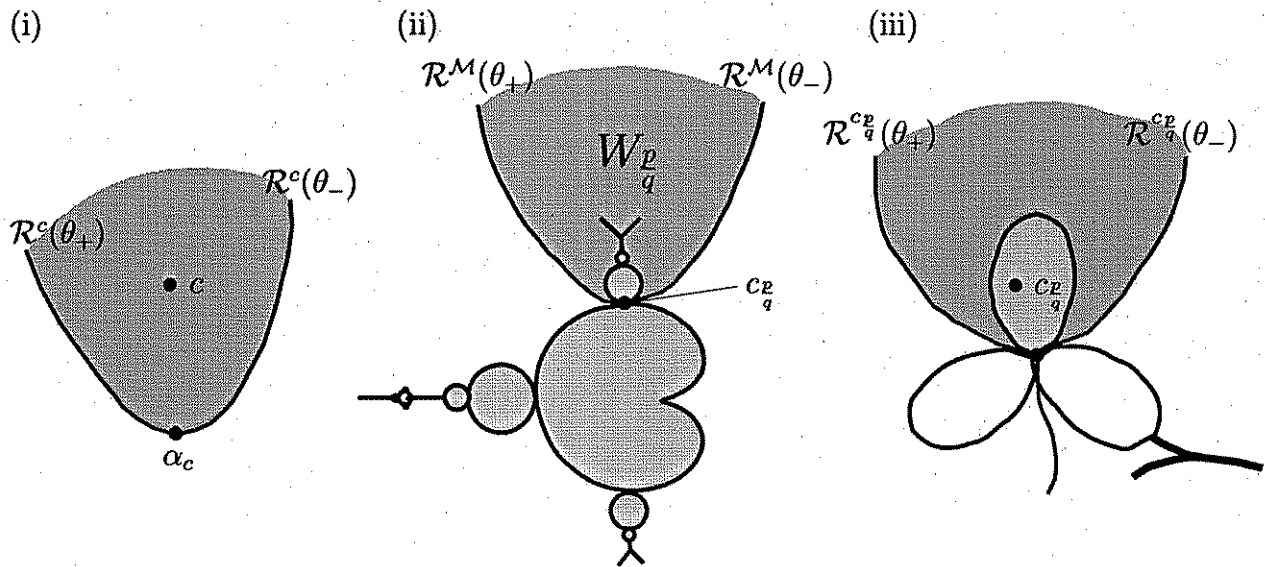


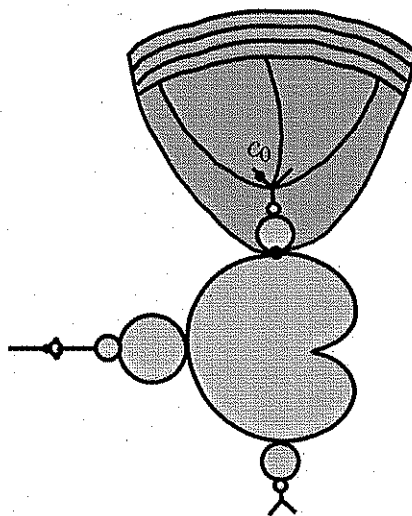
Figure 6.1

Lemma 6.1.1 にある $W_{\frac{p}{q}}$ を $\frac{p}{q}$ -wake という.

Definition 6.1.2. Lemma 6.1.1 にある θ_-, θ_+ をとり, また定数 $\eta_0 > 0$ を1つ定めて $n \geq 0$ に対して

$$\begin{aligned} \Gamma_n^M &:= \left\{ c \in \overline{W_{\frac{p}{q}}} \mid c \in \partial W_{\frac{p}{q}} \text{ or } f_c^n(c) \in \overline{\mathcal{R}^c(\theta_{\pm})} \text{ or } G_c(f_c^n(c)) = \eta_0 \right\} \\ \mathcal{P}_n^M &:= \left\{ W_{\frac{p}{q}} \setminus \Gamma_n^M \text{ の連結成分で } \mathcal{M} \text{ と交わるもの} \right\} \\ \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* &:= \mathcal{M} \cap W_{\frac{p}{q}} \setminus \left\{ c \in W_{\frac{p}{q}} \mid \exists n, f_c^n(c) = \alpha_c (= \overline{\mathcal{R}^c(\theta_-)} \cap \overline{\mathcal{R}^c(\theta_+)}) \right\} \end{aligned}$$

と定義する. ただし, G_c は §3.1.1 で定義した Green 関数である. $c \in \mathcal{M}_q^*$ であるとき \mathcal{P}_n^M の元で c を含むものを $P_n^M(c)$ と書き (parameter space における) c を含む depth n の puzzle piece という (Figure 6.2).

Figure 6.2 Γ_n^M と \mathcal{P}_n^M .

以後, ここで定義した parameter space における puzzle piece $P_n^M(c)$ と区別するために, f_c に関する \mathcal{P}_n に属する元 $P_n(c)$ のことを $P_n^c(c)$ と書くことにする.

Lemma 6.1.3. $c_0 \in \mathcal{M}_q^*$ とする.

- (1) $P_n^{c_0}(c_0)$ と $P_n^M(c_0)$ は同じ external angle と potential を持つ external rays と equi-potential curve (の一部分) で構成される. 更にそれらが現れる順番も一致する.
- (2) $\overline{P_n^M(c_0)}$ まで $P_n^c(c)$ は拡張される. 即ち, $c \in \overline{P_n^M(c_0)}$ に対しても $P_n^c(c)$ が定義される.
- (3) c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき c は $\partial P_n^c(c)$ を “1 周” する. 詳しくは $c \in \overline{P_n^M(c_0)}$ に対して同相写像

$$\partial_c : \partial P_n^M(c_0) \xrightarrow{\cong} \partial P_n^c(c)$$

が存在し, (1) と同様のことが成立する. $\overline{P_n^M(c_0)} \subset W_q$ ならこの ∂_c は $c \in \partial P_n^M(c_0)$ に対して拡張され

$$\partial_c(c) = c \in \partial P_n^c(c)$$

が成立し, 更に c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき $\partial_c(c) = c \in \partial P_n^c(c)$ は上記の external angle と potential によるパラメータづけでみて $\partial P_n^c(c)$ を 1 周する (Figure 6.3 参照).

(Outline of the Proof) : (1) は n に関する帰納法によって証明される. まず $n=0$ のときは Lemma 6.1.1 より主張が成り立つ. また例えば $\frac{p}{q} = \frac{1}{3}$ のときは $n=1, 2$ に対しては equi-potential の level が下がるだけで puzzle piece $P_n^M(c_0)$ の境界の combinatorics は変化しないことに注意せよ. この場合は $n=3$ で初めて変化が起こる. Figure 6.2 を参照せよ. また 4 章の Figure 4.2-1, 4.2-2 も参照せよ. \square

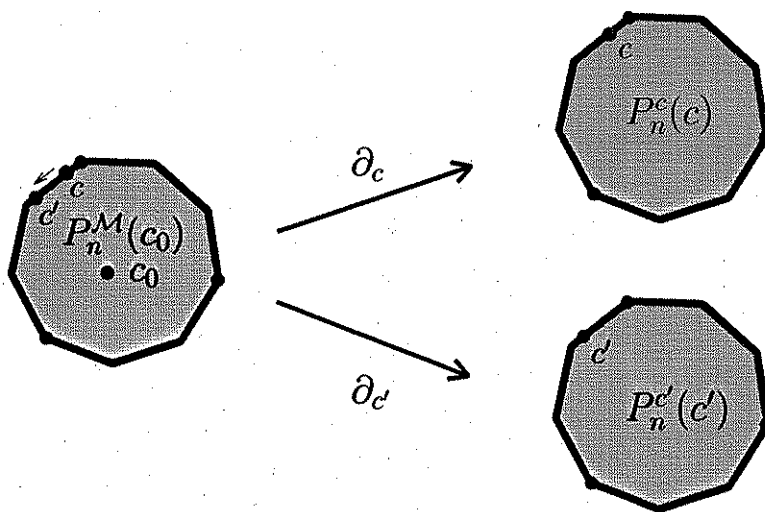


Figure 6.3

Lemma 6.1.4. $c_0 \in \mathcal{M}_q^*$ のとき $\overline{P_n^M(c_0)} \cap \mathcal{M}$ は連結.

(Proof): Lemma 4.1.1 と全く同様の議論により, もし $\overline{P_n^M(c_0)} \cap \mathcal{M}$ が連結でないとすると, \mathcal{M} が連結でないことになり Corollary 3.2.2 に矛盾することがわかる. \square

さて $c_0 \in \mathcal{M}_q^*$ とし, f_{c_0} はくりこみ可能ではないとすると, Separation Lemma (Lemma 4.1.2) より, ある $N \in \mathbb{N}$ に対して

$$\overline{P_{N+1}^{c_0}(0)} \subset P_N^{c_0}(0)$$

が成り立つ. f の作用を考えればこれは

$$\overline{P_N^{c_0}(c_0)} \subset P_{N-1}^{c_0}(c_0) \tag{6.1}$$

と同値である (4章 Figure 4.6 参照). (6.1) を用いると parameter space における Separation Lemma が次のように示される (Douady's Principle!):

Lemma 6.1.5 (Separation Lemma in Parameter Space).

- (1) $\overline{P_N^M(c_0)} \subset P_{N-1}^M(c_0) \subset W_q$ が成立する.
- (2) $c \in \overline{P_N^M(c_0)}$ ならば $\overline{P_N^c(c)} \subset P_{N-1}^c(c)$ が成立する.

(Proof): (1) Lemma 6.1.3 より external ray と potential による対応

$$\partial P_N^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_N^M(c_0), \quad \partial P_{N-1}^{c_0}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_{N-1}^M(c_0)$$

がある。(6.1) より $\partial P_N^{\text{co}}(c_0)$ と $\partial P_{N-1}^{\text{co}}(c_0)$ は交わらない。よって $\partial P_N^{\text{M}}(c_0)$ と $\partial P_{N-1}^{\text{M}}(c_0)$ も交わらない。従って $\overline{P_N^{\text{M}}(c_0)} \subset \overline{P_{N-1}^{\text{M}}(c_0)}$ が成り立つ。

(2) 同じく Lemma 6.1.3 より external ray と potential による対応

$$\partial P_N^{\text{co}}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_N^c(c), \quad \partial P_{N-1}^{\text{co}}(c_0) \longleftrightarrow \partial P_{N-1}^c(c), \quad (c \in \overline{P_N^{\text{M}}(c_0)})$$

があるので、(1) と同様の理由で $\overline{P_N^c(c)} \subset \overline{P_{N-1}^c(c)}$ が成立する。 \square

さて

$$A_n^{\text{M}}(c_0) := P_n^{\text{M}}(c_0) \setminus \overline{P_{n+1}^{\text{M}}(c_0)}$$

と定義し、今まで $A_n(x)$ と書いてきた f_c の相空間内の集合を $A_n^c(x)$ と書くことにする。Lemma 6.1.5 より $A_N^{\text{co}}(0)$ が non-degenerate annulus ならば $A_{N-1}^{\text{M}}(c_0)$ も non-degenerate annulus になる。また一般に $\mu(n+1) > 0$ ならば $A_{n+1}^{\text{co}}(0)$ が non-degenerate annulus であり、従って

$$A_n^{\text{co}}(c_0) = f_{c_0}(A_{n+1}^{\text{co}}(0))$$

も non-degenerate annulus になるので、Lemma 6.1.5 (1) の証明にあるのと同様の理由により $A_n^{\text{M}}(c_0)$ も non-degenerate annulus になる。これらの annuli の modulus の間には次の Comparison Theorem が成り立つ：

Theorem 6.1.6 (Comparison Theorem (Yoccoz)). $c_0 \in \mathcal{M}_{\frac{2}{q}}^*$ で f_{c_0} はくりこみ可能ではなく、(APR) であるとする。またこの c_0 に対して Lemma 6.1.5 にある N (separation level) をとる。このとき定数 $K = K(\frac{2}{q}, N) > 0$ が存在し、 $\mu(n+1) > 0$ なる任意の n に対して次の評価が成立する：

$$\frac{1}{K} \leq \frac{\text{mod } A_n^{\text{M}}(c_0)}{\text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0)} \leq K.$$

この定理の証明の前に、必要な概念の定義とそれらのいくつかの性質を挙げておく。

Definition 6.1.7. X を \mathbb{C} の部分集合とするとき $i: X \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ が X の holomorphic motion であるとは $i(z, \lambda) =: i_\lambda(z)$ としたとき、次を満たすことをいう：

- $i_0 = i(\cdot, 0) = \text{恒等写像}$,
- 任意の $\lambda \in \mathbb{D}$ に対し $i_\lambda = i(\cdot, \lambda)$ は単射,
- 任意の $z \in X$ に対し $i_\lambda(z)$ は λ について解析的.

また、 $\Omega, \Omega' \subset \mathbb{C}$ を開集合としたとき $f: \Omega \rightarrow \Omega'$ が K -quasi-regular であるとは

$$f = f_2 \circ f_1, \quad f_1: K\text{-quasi conformal}, \quad f_2: \text{analytic}$$

と表せることをいう。

holomorphic motion については次が成り立つ：

Theorem 6.1.8 (Optimal λ -Lemma (Ślodkowski [Sl, p.348, Theorem 1.3])).

$i : X \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ を $X \subset \mathbb{C}$ の holomorphic motion とする. このとき \mathbb{C} の holomorphic motion $\tilde{i} : \mathbb{C} \times \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$ で $\tilde{i}_\lambda : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ は quasi-conformal で, $\tilde{i}|_{X \times \mathbb{D}} = i$ となるものが存在する. \square

また, 次の Lemma は Comparison Theorem の証明の 1 つの鍵となる：

Lemma 6.1.9 ([DH2, p.327, Lemma]). $h : \mathbb{C} \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$ を holomorphic motion, $\Lambda \simeq \mathbb{D}$ (この対応により $\Lambda \ni \lambda_0 \longleftrightarrow 0 \in \mathbb{D}$), また $v : \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$ を holomorphic map とする. $c \in \Lambda$ に対して $h_c(z) := h(z, c)$ とし, $g(c) := h_c^{-1}(v(c))$ とおく. 更に $\Lambda_1 \subset \Lambda$ を開集合で $\overline{\Lambda_1} \subset \Lambda$ を満たし $\overline{\Lambda_1}$ がコンパクトになるものとする. このとき g は Λ_1 上 K -quasi-regular になり, しかも定数 K は $\sup_{z \in \partial \Lambda_1} \text{distance}(\lambda_0, z)$ (ただし “distance” は Λ 内の Poincaré distance) のみに依存する. 更に $\sup_{z \in \partial \Lambda_1} \text{distance}(\lambda_0, z) \rightarrow 0$ のとき (即ち, Λ_1 が 1 点 $\lambda_0 \in \Lambda$ に縮むとき) $K \rightarrow 1$ となる. \square

(Proof of Comparison Theorem) : $\Lambda := P_N^M(c_0)$ とし, holomorphic motion

$$i : (\partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0)) \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$$

を次で定義する (注 : $\partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0) = \partial A_N^{\text{co}}(0)$ である) :

1. $i(*, c_0) = \text{id}$,
2. $i_c := i(*, c) : \partial P_{N+1}^{\text{co}}(0) \cup \partial P_N^{\text{co}}(0) \rightarrow \partial P_{N+1}^c(0) \cup \partial P_N^c(0)$ は external angle と potential による canonical な対応 (Lemma 6.1.3).

定義より任意の c に対して i_c は単射になり, また任意の z に対して $i_c(z)$ は c について解析的であるから, 確かに i は holomorphic motion になる. すると Optimal λ -Lemma より holomorphic motion

$$h : \mathbb{C} \times \Lambda \rightarrow \mathbb{C}$$

で $h|\partial A_N^{\text{co}}(0) \times \Lambda = i$ を満たすものが存在する. $h_c := h(*, c)$ とおく. $\mu(n+1) > 0$ となる n を考えると $f_{c_0}^{n-N}$ によって $A_n^{\text{co}}(c_0)$ は $A_N^{\text{co}}(0)$ に写され

$$f_{c_0}^{n-N} : A_n^{\text{co}}(c_0) \rightarrow A_N^{\text{co}}(0)$$

はある $k \in \mathbb{N}$ に対して 2^k 次の covering になる. すると Lemma 6.1.3 より $c \in \overline{P_n^M(c_0)}$ のとき

$$f_c^{n-N} : A_n^c(c_0) \rightarrow A_N^c(0)$$

も 2^k 次の covering になる. また先に説明したように $\overline{P_{n+1}^M(c_0)} \subset P_n^M(c_0)$ であり Lemma 6.1.3 より c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき c は $\partial P_n^c(c)$ を 1 周する. 従って c が $\partial P_n^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n-N}(c)$ は $\partial P_N^c(0)$ をちょうど 2^k 周する. 同様に c が $\partial P_{n+1}^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n-N}(c)$ は $\partial P_{N+1}^c(0)$ をちょうど 2^k 周する. そこで $g : \overline{A_n^M(c_0)} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$g(c) = h_c^{-1} \circ f_c^{n-N}(c)$$

で定義すると次が成り立つ：

Lemma 6.1.10. g は $A_n^M(c_0)$ から $A_N^{\text{co}}(0)$ への 2^k 次の covering であり, 内点においては quasi-regular である.

(Proof): g が quasi-regular であることは Lemma 6.1.9 からただちに従う. また先程述べたとおり g は $\partial A_n^M(c_0)$ 上では 2^k 次の covering である. この2つのことから g は $A_n^M(c_0)$ から $A_N^{\text{co}}(0)$ への 2^k 次の covering にならざるを得ない (つまり critical point を持ち得ない). \square

この Lemma より g は quasi-regular であるので次のように分解できる:

$$g : A_n^M(c_0) \xrightarrow{f_1} f_1(A_n^M(c_0)) \xrightarrow{f_2} A_N^M(0),$$

$$f_1 : K_n\text{-quasi conformal}, \quad f_2 : \text{analytic}, \quad 2^k\text{ 次の covering}$$

このことから

$$\frac{1}{K_n} \cdot \frac{1}{2^k} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_N^{\text{co}}(0)} \leq K_n \cdot \frac{1}{2^k}$$

であることがわかる. これと

$$\text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0) = \frac{1}{2^k} \cdot \text{mod } A_N^{\text{co}}(0)$$

であることから

$$\frac{1}{K_n} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0)} \leq K_n$$

が従う. ここで定数 K_n は, 一般に $P_n^M(c_0) \supseteq P_{n+1}^M(c_0)$ であることを考えると Lemma 6.1.9 より n によらない値でとりかえることができる. つまり $K = K(\frac{p}{q}, N)$ で任意の n に対して $K_n \leq K$ を満たすものがとれる. よって

$$\frac{1}{K} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0)} \leq K$$

が成り立つ. \square

6.2 Theorem B の証明

$c_0 \in \mathcal{M}$ とし f_{c_0} は (APR) を満たし, 更にくりこみ可能でないとする.

(Step I) $c_0 \in (\text{PR})_{\mathcal{M}}$ または $(\text{IR})_{\mathcal{M}}$ の場合:

$\mu(n+1) > 0$ であるとき $f : A_{n+1}^{\text{co}}(0) \rightarrow A_n^{\text{co}}(c_0)$ は 2 対 1 の covering になるので

$$\text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0) = 2 \cdot \text{mod } A_{n+1}^{\text{co}}(0) > 0$$

が成り立つ. よって Combinatorial Divergence Theorem より

$$\sum_{\mu(n+1) > 0} \text{mod } A_n^{\text{co}}(c_0) = \infty$$

であることがわかる. 従って Comparison Theorem より

$$\sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^M(c_0) \geq \frac{1}{K} \sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^{co}(c_0) = \infty$$

即ち

$$\sum_{\mu(n+1)>0} \text{mod } A_n^M(c_0) = \infty$$

が従う. よって Proposition 2.3.11 より

$$\text{diam } P_n^M(c_0) \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

となる. これは M が c_0 で局所連結であることを示す.

(Step II) $c_0 \in (\text{NR})_M$ の場合 :

証明の outline だけを以下で述べる.

$$K_m^{co} := \{x \in K_{c_0}^* \mid f_{c_0}^n(x) \notin P_m^{co}(0), n = 0, 1, \dots\}$$

とすると $c_0 \in (\text{NR})_M$ より, 適当な $m \in \mathbb{N}$ に対して $c_0 \in K_m^{co}$ となる. そこで

$$Q_k^{co} := P_m^{co}(f^k(c_0)) \in \mathcal{P}_m^{co} \setminus \{P_m^{co}(0)\}$$

とすると $n \geq m$ のとき $P_n^{co}(c_0)$ は $f^{-(n-m)}(Q_{n-m}^{co})$ の連結成分である. 更に詳しく

$$P_n^{co}(c_0) = (f_{c_0}|_{Q_0^{co}})^{-1} \circ (f_{c_0}|_{Q_1^{co}})^{-1} \circ \dots \circ (f_{c_0}|_{Q_{n-m-1}^{co}})^{-1}(Q_{n-m}^{co}) \quad (6.2)$$

と表せる (注: ただし $f_{c_0}^{-1}$ の branch は各段階で適当なものをとる). ここで $c \in P_m^M(c_0)$ ならば $P_m^M(c_0)$ の定義から Γ_m^{co} と Γ_m^c は combinatorial に同型であることがわかる. そこで $c \in P_m^M(c_0)$ に対して

$$R_n^c := (f_c|_{Q_0^c})^{-1} \circ (f_c|_{Q_1^c})^{-1} \circ \dots \circ (f_c|_{Q_{n-m-1}^c})^{-1}(Q_{n-m}^c)$$

とすると (注: ただし f_c^{-1} の branch は (6.2) にあるのと同様にとる) $R_n^c \in \mathcal{P}_n^c$ である. また

$$R_m^c \supset R_{m+1}^c \supset \dots$$

であり, Theorem A の証明の (Step I) で述べた双曲性を使った議論から

$$\text{diam } R_n^c \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

が示せる. 次に

$$R_n^M := \{c \in P_m^M(c_0) \mid c \in R_n^c\}$$

とおくと (注: 一般に $c \in R_n^c$ であるかどうかはわからない)

$$R_m^M \supset R_{m+1}^M \supset \dots, \quad c_0 \in \bigcap_{n \geq m} R_n^M$$

が成り立つ。実は

$$R_n^M = P_n^M(c_0)$$

でありしかも

$$\text{diam } R_n^M \rightarrow 0, \quad (n \rightarrow \infty)$$

であることが示せる。従って M は c_0 で局所連結である。

以上で Theorem B は証明された。 \square

$c_0 \in (\text{PR})_M$ または $(\text{IR})_M$ の場合は Comparison Theorem によって証明したわけであるが、この場合に z -plane における c_0 を囲む annulus $A_n^{co}(c_0)$, c -plane における c_0 を囲む annulus $A_n^M(c_0)$ それぞれの modulus の比の極限については次のことが成り立つ:

Corollary 6.2.1 . $\mu(n_k + 1) > 0$, $n_k \nearrow \infty$ なる列 $\{n_k\}_{k=1}^\infty$ に対して

$$\frac{\text{mod } A_{n_k}^M(c_0)}{\text{mod } A_{n_k}^{co}(c_0)} \rightarrow 1 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成立する。

(Proof) : Comparison Theorem の証明より

$$\frac{1}{K_n} \leq \frac{\text{mod } A_n^M(c_0)}{\text{mod } A_n^{co}(c_0)} \leq K_n$$

であり、定数 K_n は Lemma 6.1.9 より $\sup_{z \in \partial P_n^M(c_0)} \text{distance}(c_0, z)$ (ただし “distance” は $P_n^M(c_0)$ 内の Poincaré distance) によるものである。そして Theorem B の証明より

$$\text{diam } P_n^M(c_0) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

即ち、 $P_n^M(c_0)$ は 1 点 c_0 に縮むので再び Lemma 6.1.9 より

$$K_n \rightarrow 1 \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成り立つ。よって

$$\frac{\text{mod } A_{n_k}^M(c_0)}{\text{mod } A_{n_k}^{co}(c_0)} \rightarrow 1 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成立する。 \square

6.3 Theorem D の証明

f_c はくりこみ可能ではなく、また f_c のすべての周期点は反発的であるとする。以下ではパラメーター c に対する τ -関数とこれに付随する Σ , それに weight function μ をそれぞれ $\tau^{(c)}$, Σ^c , μ^c と書くことにする。 α -不動点の combinatorial rotation number $\frac{p}{q} \in (0, 1)$ と separation level N をそれぞれ 1 つとり固定する。 f_c が 4 つの条件

1. f_c はくりこみ可能ではない,
2. f_c のすべての周期点は反発的である,
3. f_c の α -不動点の combinatorial rotation number は $\frac{p}{q}$,
4. f_c の separation level は N ,

を満たすことをまとめて (*) の記号で表すことにする. そこで $\mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^*$ を次の3つの集合に分類する:

$$\begin{aligned}
 Y_k &= Y_{\frac{p}{q}, N, k} \quad (k = 1, 2, \dots) \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \sup_{n \in \mathbb{N}} \tau^{(c)}(n) = \infty, \sup \tau^{(c)^{-1}}(N) = k, \liminf_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) > N \right\} \\
 Y_\infty &= Y_{\frac{p}{q}, N, \infty} \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \limsup_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) > N, \liminf_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) \leq N \right\} \\
 Z_m &= Z_{\frac{p}{q}, N, m} \quad (m = 1, 2, \dots) \\
 &:= \left\{ c \in \mathcal{M}_{\frac{p}{q}}^* \mid (*), \limsup_{n \rightarrow \infty} \tau^{(c)}(n) < m \right\}
 \end{aligned}$$

この分類は Theorem C の証明のときに用いたやり方に従っている. ただしそのときに使ったのと同じような記号を一部使っているが, 意味しているものは全く違うので注意していただきたい. またすべての場合について「 f_c はくりこみ可能ではない」としているので, 常に $\#\Sigma^c = \infty$ である (Proposition 4.2.2 (2) 参照). 更に

1. $c \in (\text{PR})_M$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Y_k$,
2. $c \in (\text{IR})_M$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Y_k$, または $c \in Y_\infty$,
3. $c \in (\text{NR})_M$ ならば, ある $k \in \mathbb{N}$ に対して $c \in Z_k$,

となる. よって Theorem D を証明するには Y_k, Y_∞, Z_k の各々が測度 0 であることを示せば十分である. そのための方法は Theorem C の証明のときと同様で Y_k は Modulus-Area inequality と Combinatorial Divergence Theorem で, Y_∞ は Koebe's Distortion Theorem を使った議論で, Z_k は双曲性を使った議論で, それぞれ証明する.

(Step I) Y_k について:

$$A_k^M = A_{\frac{p}{q}, N, k}^M := \{A_n^M(c) \mid c \in Y_k, n > k, \mu^c(n+1) > 0\}$$

とすると Theorem C の証明の (Step II) と同様に次が成り立つ:

Lemma 6.3.1. A_k^M の相異なる annuli は互いに disjoint である.

(Proof) : $c_1, c_2 \in Y_k$ で $k < n < m$ として $A_n^M(c_1)$ と $A_m^M(c_2)$ が disjoint でなかったとする (Figure 6.4 参照).

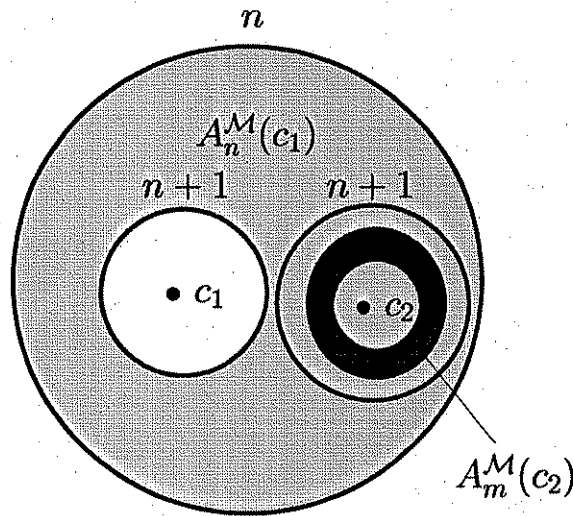


Figure 6.4 c -plane における pieces の関係.

このとき $A_m^M(c_2)$ を含む $(n+1)$ -piece を考えると Figure 6.4 のようになっており, depth n と $n+1$ のときの pieces の境界の combinatorial な対応を考えると (Lemma 6.1.3), $c = c_1$ の z -plane では Figure 6.5 のようなことがおこっていることがわかる :

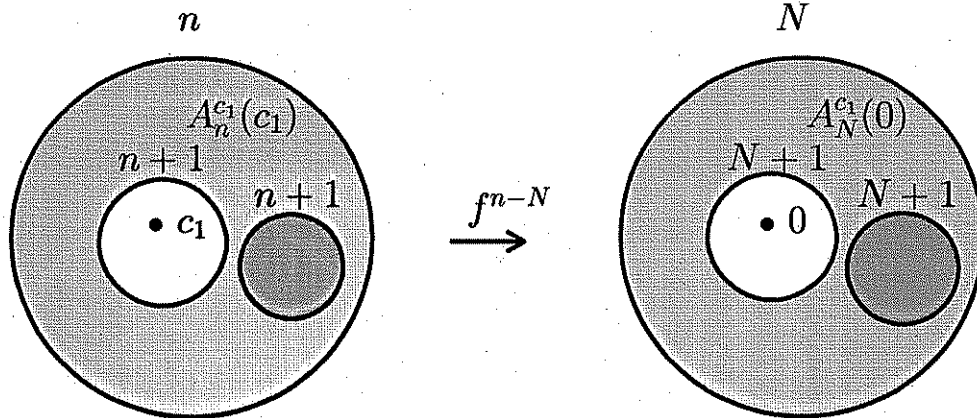


Figure 6.5 $c = c_1$ のときの z -plane における pieces の関係.

さて, $P_n^M(c_1)$ の定義より c が $P_n^M(c_1)$ 内を動くとき $P_n^c(c)$ 中の $(n+1)$ -pieces の combinatorics は変化しないことがわかる. また一方, $P_n^{c_1}(c_1)$ 中の $(n+1)$ -pieces と $P_n^M(c_1)$ 中の $(n+1)$ -pieces の間には 1 対 1 対応がつく. この 2 つの事実から $c = c_2$ に対しても $\partial P_{n+1}^M(c_2)$ と $\partial P_{n+1}^{c_2}(c_2)$ の間に 1 対 1 対応がつくことがわかる. 従って

$$f_{c_2}^{n-N} : P_{n+1}^{c_2}(c_2) \rightarrow P_{N+1}^{c_2}(f_{c_2}^{n-N}(c_2))$$

であり, 更に任意の $0 \leq j \leq n - N$ に対して $0 \notin f_{c_2}^j(P_{n+1}^{c_2}(c_2))$ である. これは

$$\tau^{(c_2)}(n+2) \leq N$$

であることを示しており, 一方 $\sup_{n \in \mathbb{N}} \tau^{(c_2)}(n) = \infty$ であるから中間値の定理より, ある $k' \geq n+2$ に対して $\tau^{(c_2)}(k') = N$ となる. これは $\max \tau^{(c_2)^{-1}}(N) = k < n$ であること, 即ち, $c_2 \in Y_k$ であることに反する. \square

さて, $c \in Y_k$ だから Combinatorial Divergence Theorem より

$$\sum_{\mu^c(n+1) > 0} \mu^c(n+1) = \infty$$

であるから Proposition 4.2.16 と Comparison Theorem を考慮すると

$$Y_k \subset \left\{ z \in \mathbb{C} \mid \sum_{z \in D_A, A \in \mathcal{A}_k^M} \text{mod } A = \infty \right\}$$

が成り立つ. すると Lemma 2.3.14 より $|Y_k| = 0$ がわかる.

(Step II) Y_∞ について:

任意の $c_0 \in Y_\infty$ が Y_∞ の density point でないことを以下で示す.

$c_0 \in Y_\infty$ より自然数の列 $n_1 < n_2 < \dots < n_j < \dots$ で

$$\tau^{(c_0)}(n_j) = N, \quad n_j \notin \Sigma^{c_0} \quad (\text{即ち, } \tau^{(c_0)}(n_j + 1) = N + 1)$$

となるものが存在する. すると

$$f_{c_0}^{n_j - N - 1} : A_{n_j - 1}^{c_0} \rightarrow A_N^{c_0}(0) \quad (6.3)$$

は conformal である. c が $\partial P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を 1 周するとき Lemma 6.1.3 より c は $\partial P_{n_j - 1}^c(c)$ を 1 周し, (6.3) より $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ は $\partial P_N^c(0)$ を 1 周する. ここで \mathcal{M} の c_0 における局所連結性の証明から

$$\text{diam } P_{n_j - 1}^M(c_0) \rightarrow 0, \quad (j \rightarrow \infty)$$

であることがわかっている. j が十分大なら c が $P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を動くとき $\partial P_N^c(0)$, $\partial P_{N+1}^c(0)$ は相空間である複素平面上をほとんど動かない. 従って c が $P_{n_j - 1}^M(c_0)$ を 1 周するとき $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ は $\overline{P_{N+1}^{c_0}(0)}$ の外側を 1 周することになる. よって関数 $f_c^{n_j - N - 1}(c)$ の逆関数

$$g_i : P_{N+1}^{c_0}(0) \rightarrow P_{n_j - 1}^M(c_0)$$

が定義できる (注: 偏角の原理による). そこで

$$B \subset P_{N+1}^{c_0}(0) \setminus K_{c_0}$$

を 1 つの閉円板とすると, c が c_0 に十分近ければ

$$B \subset \mathbb{C} \setminus K_c \quad (6.4)$$

となる. よって j を十分大として $c \in P_{n_j - 1}^M(c_0)$ のとき (6.4) が成立しているとしてよい. ここで $c \in g_i(B)$ とすると

$$f_c^{n_j - N - 1}(c) \in B \subset \mathbb{C} \setminus K_c$$

であるから $c \notin M$, 即ち, $c \notin Y_\infty$ である. よって Koebe's Distortion Theorem と Proposition 2.2.6 より c_0 は Y_∞ の density point ではあり得ない. 従って Lebesgue's Density Theorem より $|Y_\infty| = 0$ である.

(Step III) Z_m について:

証明の outline を以下で示す.

$$K_m^c := \{x \in K_c^* \mid f_c^n(x) \notin P_m^c(0), n = 0, 1, \dots\}$$

とすると (注: K_m^c の "c" は補集合を表す記号ではないことに注意), Proposition 5.1.4 より $c \in Z_m$ なら $c \in K_m^c$ である. さて, $c_0 \in Z_m, c \in \overline{P_m^M(c_0)}$ のとき itinerary で対応をつけることにより

$$K_m^{c_0} \xrightarrow{\cong} K_m^c$$

なる同型写像がつけられる. これを用いると holomorphic motion

$$i: K_m^{c_0} \times P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

であって

$$i_c(z) := i(z, c): K_m^{c_0} \rightarrow K_m^c$$

となるものが構成できる. すると任意の $z \in K_m^{c_0}$ に対して写像

$$z(c) := i_c(z): P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

は恒等写像 $z(c) \equiv c$ とはならないことがわかる. Optimal λ -Lemma (Theorem 6.1.8) より i は holomorphic motion

$$\tilde{i}: \mathbb{C} \times P_m^M(c_0) \rightarrow \mathbb{C}$$

に拡張される. そこで

$$g(c) := \tilde{i}_c^{-1}(c)$$

とおくと g は $g(c_0) = c_0$ を満たし, また Lemma 6.1.9 より quasi-regular である. U を c_0 の任意の近傍とすると構成の方法から

$$Z_m \cap U = g^{-1}(K_m^{c_0}) \cap U$$

であることがわかる. さて $K_m^{c_0}$ は Theorem C の証明の (Step IV) より測度 0 であった. quasi-regular map は「測度 0 である」という性質を保存するので, これから $|Z_m \cap U| = 0$ であることがわかる. $c_0 \in Z_m$ は任意であったから $|Z_m| = 0$ が示されたことになる.

以上で Theorem D は証明された. □

Remark 6.3.2. (1) $f(z) = z^l + c$ の形の多項式で l が十分大のとき, ある $c \in \mathbb{R}$ に対して f はくりこみ可能ではなく, すべての周期点は反発的であり, しかも $|J_f| > 0$ となる, という主張もある ([NvS, p.2, Main Theorem]).

(2) Remark 1.1.10 でも述べたとおり, 無理的中立周期点をもつ p_c で, J_c が局所連結でないような例がある. そこで

回転数 (Diophantine condition) で局所連結性を特徴づけられるか?

という問題が考えられるが, これについては [Pe2] を参照せよ.

(3) 無限回くりこみ可能な p_c で, J_c が局所連結でないような例がある ([Mi2, §3]). そこで

くりこみの周期のパターンで局所連結性を特徴づけられるか?

という問題が考えられる ([Ly3] も参照せよ).

Appendix A

Branner-Hubbard の 3 次多項式に関する 理論

以下では f を 3 次多項式とし, ω_1, ω_2 を 2 つの critical points とする. このとき可能性として次の 3 通りが考えられる:

1. $\omega_1, \omega_2 \in K_f$,
2. $\omega_1, \omega_2 \in \mathbb{C} \setminus K_f$,
3. ω_1, ω_2 のどちらか一方が K_f に属し, もう一方が $\mathbb{C} \setminus K_f$ に属する.

最初の 2 つの場合は Theorem 1.1.1 よりそれぞれ K_f は連結, K_f は Cantor 集合となる. そこで以下では残りの第 3 の場合を考える. これに関しては次が成り立つ:

Theorem A.0.1 (Branner-Hubbard [BH, p.273, Theorems 5.3; p.278, Theorem 5.9]). f, ω_1, ω_2 を上のとおりとし, $\omega_1 \in K_f, \omega_2 \notin K_f$ であるとする. ここで $K(\omega_1)$ を K_f の ω_1 を含む連結成分とする. このとき次のどちらかが成立する:

(1) $K(\omega_1)$ が f に関して周期的 (即ち, ある $p \in \mathbb{N}$ に対して $f^p(K(\omega_1)) = K(\omega_1)$) ならば, $U \supset K(\omega_1)$ なる開集合 U が存在して $f^p: U \rightarrow f^p(U)$ が次数 2 の polynomial-like mapping となる. 即ち, $U, f^p(U)$ は単連結で $f|_U$ が 2 : 1 の covering であり, $f^p(U) \supset \bar{U}$ が成立する. 従ってこのときはある $c \in M$ に対して $K(\omega_1) \simeq K_c$ となる.

(2) $K(\omega_1)$ が f に関して周期的でないならば, K_f は Cantor 集合であり, 更に $|K_f| = 0$ である.

Remark A.0.2. 上記定理 (2) の $|K_f| = 0$ の主張は McMullen による ([BH, p.235]).

この結果は元の論文では Tableau を用いて証明されているし, また [Mi2, §2] ではこの結果の一般化として d 次多項式で 1 つの critical point を除いてすべての critical points が $\mathbb{C} \setminus K_f$ に属する場合に同様な結果が得られることが, やはり Tableau を用いて示されている. ここではこの場合に通用する τ -関数を新たに定義し, それに付随した weight function に関する Combinatorial Divergence Theorem を示すことによって証明する. なお, 以下の証明は 宍倉による.

最初に第 3 の場合の例を 2 つだけ挙げておく。

Example A.0.3. (1) $f_\lambda(z) := \lambda z^2(z-1)$ とし $\omega_1 := 0$, $\omega_2 := \frac{2}{3}$ とすると, $f_\lambda(\omega_1) = \omega_1$ でありまた λ が十分大のとき $f_\lambda^n(\omega_2) \rightarrow \infty$ となる。

(2) f が実 3 次多項式で Figure A.1 のようなグラフを持つ場合, $f(\omega_1) = \alpha$ で α は反発不動点である。更に $K(\alpha)$ を α を含む K_f の連結成分とすると $K(\omega_1) \neq K(\alpha)$ で

$$f(K(\omega_1)) = K(\alpha), \quad f(K(\alpha)) = K(\alpha)$$

が成り立つ。また $f_\lambda^n(\omega_2) \rightarrow \infty$ となる (Theorem 1.1.3 参照)。

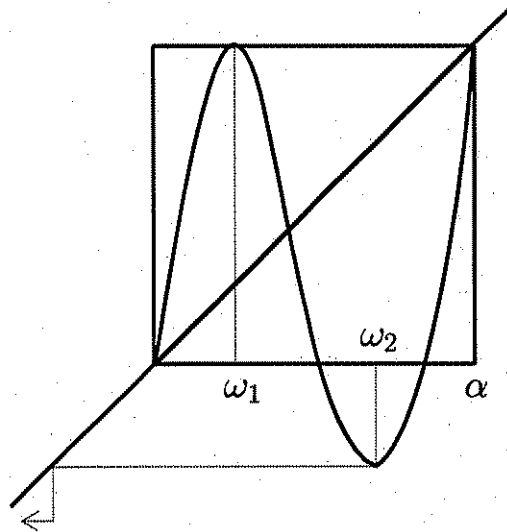


Figure A.1

(Proof of Theorem A.0.1) : §3.1.1 で 2 次多項式に対して構成したのと同様にして f に対して

$$\varphi = \varphi_f : \infty \text{ の近傍} \rightarrow \infty \text{ の近傍}$$

なる conformal map φ と Green 関数 $h : \mathbb{C} \setminus K_f \rightarrow \mathbb{R}_+$ が定義できる。これらは次を満たす:

$$\varphi_f \circ f(z) = (\varphi_f(z))^3, \quad \frac{\varphi(z)}{z} \rightarrow 1 \quad (z \rightarrow \infty),$$

$$h(z) = \log |\varphi(z)| = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{3^n} \log^+ |f^n(z)|.$$

さて, 2 次多項式の場合は external rays と equi-potential curves で partition (Yoccoz puzzle) を構成したが, ここでは equi-potential curves だけを用いて partition (Branner-Hubbard puzzle) を次のようにして構成する: まず,

$$\Gamma_0 := \{z \mid h(z) = h(f(\omega_2))\}$$

とする。即ち, critical value $f(\omega_2)$ を含む equi-potential curve を Γ_0 と定義するのである。次に $\Gamma_1 := f^{-1}(\Gamma_0)$ とすると Γ_1 は Figure A.2-1 にあるように ω_2 を通る 8 の字型の curve になる。以下, 帰納的に

$$\Gamma_n := f^{-n}(\Gamma_0)$$

と定義すると, Γ_n は Jordan cruves をつなぎ合わせたものの集まりとなる (Figure A.2-1 ~3 参照). Γ_2, Γ_3 は $f(\omega_1)$ の位置によって Figure A.2-2, A.2-3 のようになる:

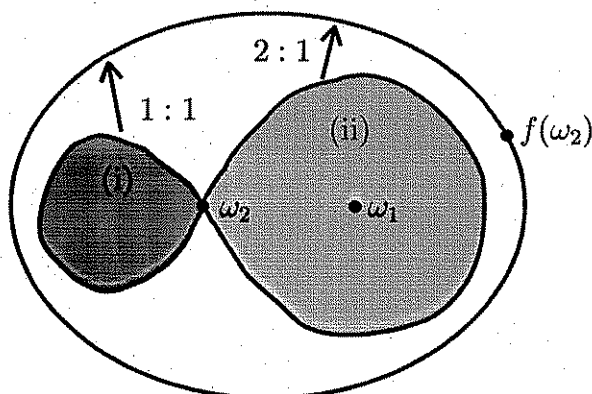


Figure A.2-1 Γ_0 と Γ_1 .

(1) Figure A.2-1 (i) に $f(\omega_1)$ がある場合

(2) Figure A.2-1 (ii) に $f(\omega_1)$ がある場合

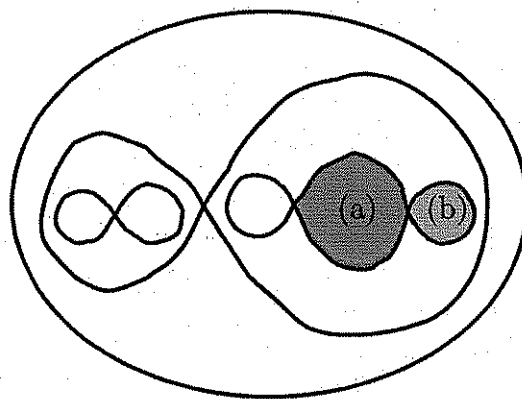
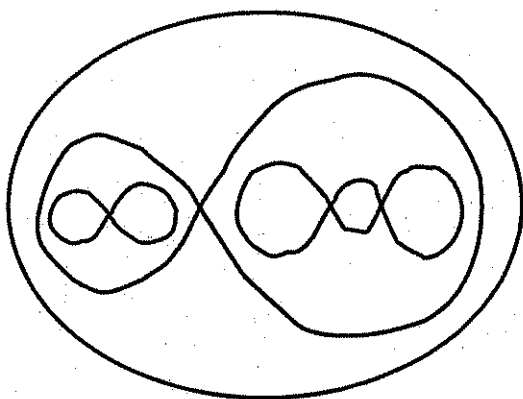


Figure A.2-2 $\Gamma_0 \sim \Gamma_2$.

(3) Figure A.2-2 (a) に $f(\omega_1)$ がある場合

(4) Figure A.2-2 (b) に $f(\omega_1)$ がある場合

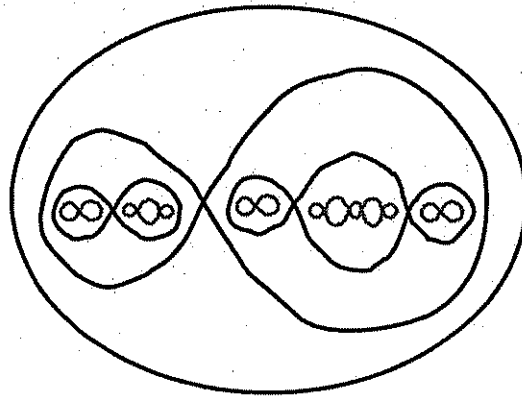
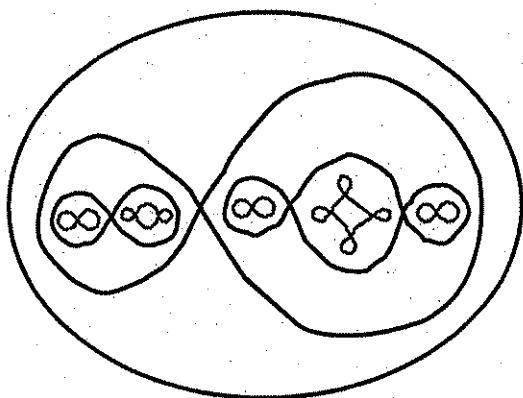


Figure A.2-3 $\Gamma_0 \sim \Gamma_3$.

次に

$$\mathcal{P}_n := \{\mathbb{C} \setminus \Gamma_n \text{ の有界連結成分} \}$$

と定義し、また $x \in K_f$ に対して

$$P_n(x) := \mathcal{P}_n \text{ の元で } x \text{ を含むもの}$$

とする。そこで

$$\begin{aligned} A_n(x) &:= P_n(x) \setminus \bigcup_{y \in P_n(x) \cap K_f} \overline{P_{n+1}(y)} \quad (n \geq 0) \\ &= \Gamma_n \text{ と } \Gamma_{n+1} \text{ で囲まれた annuli のうち } x \text{ を囲むもの} \end{aligned}$$

で x を囲む annulus を定義する (Figure A.3).

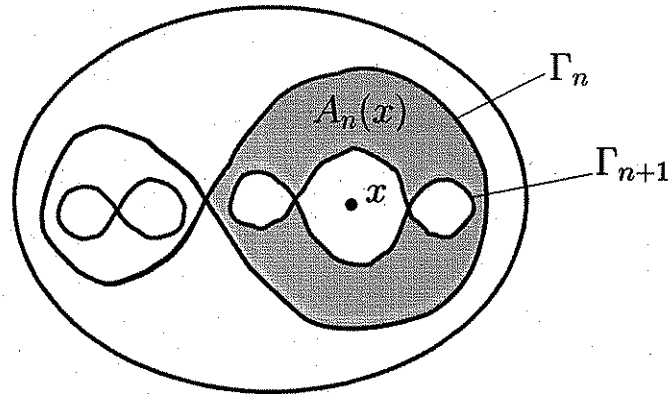


Figure A.3 $x \in K_f$ と $A_n(x)$.

ここで $A_n(x)$ が critical point ω_1 を囲むとき (即ち, $\omega_1 \in D_{A_n(x)}$ ($= A_n(x)$ の内側) となる) **critical** と呼ぶことにすると

$$f: A_n(x) \rightarrow A_{n-1}(f(x)) \quad (n \geq 1)$$

は annuli の間の covering map であり, $A_n(x)$ が critical なら次数 2, $A_n(x)$ が non-critical なら次数 1 (即ち, 同型) である. 一般に $A_n(x)$ を f で写していくと

$$A_n(x) \xrightarrow{f} A_{n-1}(f(x)) \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} A_{n-i}(f^i(x)) \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} A_0(f^n(x)) = A_0$$

となる. ただし A_0 は level 0 の annulus (注: これは 1 つしかない) であり, これは critical である. そして

$$\text{mod } A_n(x) = \frac{1}{2^k} \cdot \text{mod } A_0 \quad \text{ただし } k = \#\{i \mid 0 \leq i < n, A_{n-i}(f^i(x)) \text{ は critical}\}$$

が成り立つ. そこで任意の $x \in K_f$ に対して

$$\sum_{n=0}^{\infty} \text{mod } A_n(x) = \infty$$

となるかどうかを見ることになる (Figure A.4 参照).

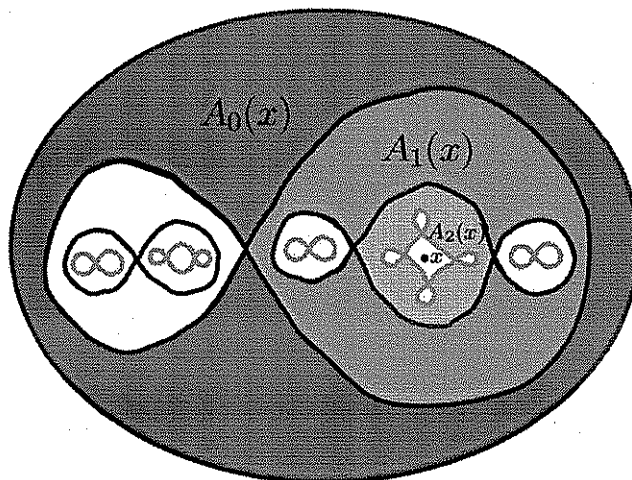


Figure A.4 $x \in K_f$ と $A_0(x), A_1(x), A_2(x), \dots$.

そこで次に任意の $x \in K_f$ に対して τ -関数 $\tau_x : \mathbb{N}^* \rightarrow \mathbb{N}^*$ を2次多項式のとときと同様に

$$\tau_x(n) := \max\{n - k \mid 0 \leq k \leq n, f^k(A_n(x)) = A_{n-k}(f^k(x)) \text{ が critical}\}$$

で定義する. ここで任意の x に対して $f^n(A_n(x)) = A_0(f^n(x)) = A_0$ であり, A_0 は critical であるから, 上記定義式で \max は必ず存在する. 従って2次多項式のとときのように τ_x の値域に -1 をもってくる必要はない.

$$\underbrace{A_n(x)}_{\text{non-critical}} \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} \underbrace{A_{n-i}(f^i(x))}_{\text{critical}} \xrightarrow{f} \dots \xrightarrow{f} \underbrace{A_0}_{\text{critical}}$$

のとき $\tau_x(n) = n - i$ である. $\tau_x(n)$ は $A_n(x)$ を f で写していったとき最初に遭遇する critical annulus の level である. また $\tau : \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{N}^*$ を

$$\tau(n) := \tau_{f(\omega_1)}(n - 1)$$

で定義し

$$\Sigma := \{n \mid \tau(n+1) \neq \tau(n) + 1\}$$

とすると2次多項式のとときと同様に, この τ -関数に対して Axiom of recurrence, 即ち, $n \in \Sigma$ なら $\tau(n+1) = 0$ または

$$\tau(n+1) = \tau^{k+1}(n) + 1 \quad (k \geq 1, \tau^k(n) \in \Sigma)$$

と表せることが示せる (証明の方法も全く同様である. Proposition 4.2.2 (1) の証明を参照せよ).

さてここで $\#\Sigma < \infty$ のときを考えると, ある $k, n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して $\tau(n) = n - k$ ($n \geq n_0$) であり

$$f^k : P_n(\omega_1) \rightarrow P_{n-k}(\omega_1) : 2 \text{ 対 } 1 \text{ の covering, かつ } f^{ki}(\omega_1) \in P_n(\omega_1) \ (\forall i \geq 0)$$

が成り立つ. ただし $P_n(\omega_1) := A_n(\omega_1) \cup D_{A_n(\omega_1)}$, 即ち $P_n(\omega_1)$ は $A_n(\omega_1)$ の内側を埋めて得られる単連結領域である. よって $f^k|_{P_n(\omega_1)}$ は次数 2 の polynomial-like mapping であるから, ある $c \in \mathcal{M}$ に対して $f^k|_{P_n(\omega_1)} \sim z^2 + c$ (qc-conjugate) となる. 更に

$$K(\omega_1) = K(f^k : P_n(\omega_1) \rightarrow P_{n-k}(\omega_1)) \simeq K_c$$

である. 以上で (1) は証明された.

次に $\sup_{n \in \mathbb{N}} \tau(n) < \infty$ のときを考えると, この場合も Proposition 4.2.2 (3) と同様に critical point ω_1 が non-recurrent, 即ち, ある n_0 が存在し

$$f^j(\omega_1) \notin P_{n_0}(\omega_1), \quad (j \geq 1)$$

が成り立つことがわかる.

さて, $\#\Sigma = \infty$ かつ $\sup \tau = \infty$ であるとする, この τ -関数について 2 次多項式のときと全く同様にして次が示せる:

Proposition A.0.4. $\#\Sigma = \infty, \sup \tau = \infty$ であるとする, 次が成立する:

- (1) 任意の $n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ に対して $\#(\tau^{-1}(n) \setminus \Sigma) \geq 1$.
- (2) 任意の $n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ に対して $\#\tau^{-1}(n) \geq 2$.
- (3) $k = \sup(\tau^{-1}(n) \setminus \Sigma) < \infty$ ならば $(\bigcup_{j=0}^{\infty} \tau^{-j}(k)) \cap \Sigma = \emptyset$. □

証明は Proposition 4.2.7 のそれと全く同様である.

ここで weight function $\mu(n) \in \mathbb{R}_+$ を次のように定義する: $\mu(0) := 1$ とし, $n \geq 1$ に対しては

$$\mu(n) = \frac{1}{2} \mu(\tau(n))$$

とする. このときも次の Combinatorial Divergence Theorem が成り立つ:

Theorem A.0.5. $\#\Sigma = \infty$ であるとする. このとき

$$\sum_{n=0}^{\infty} \mu(n) = \infty$$

が成立する.

Remark A.0.6. 2 次多項式のときの Divergence Theorem では $\#\Sigma = \infty$ の他に $\sup \tau = \infty$ も仮定していた. 今の場合はこの仮定は必要ではない.

(Proof of Theorem A.0.5) : $\sup \tau < \infty$ のときは, ある $m \geq 0$ に対して

$$\#(\tau^{-1}(m) \setminus \Sigma) = \infty$$

となる. よって

$$\sum_{n \in \tau^{-1}(m)} \mu(n) = \frac{1}{2} \sum_{n \in \tau^{-1}(m)} \mu(m) = \infty$$

となる. $\sup \tau = \infty$ のときは Proposition A.0.4 を用いれば, 2次多項式るとき (Theorem 4.2.10) と全く同様にして証明することができる. \square

$\mu(n)$ の定義から

$$\text{mod } A_n(x) = \mu_x(n) \cdot \text{mod } A_0 \quad (\text{A.1})$$

であることがわかる. ただし $\mu_x(n) := \mu(\tau_x(n))$ である (注: Proposition 4.2.16 とその証明を参照せよ).

さて $K(\omega_1)$ が周期的でないときは $\#\Sigma = \infty$ であるから Theorem A.0.5 が成り立ち, Theorem 4.2.15 の証明と同様にして μ_x に関する Combinatorial Divergence Theorem が示せる. このことと (A.1) より任意の $x \in K_f$ に対して

$$\sum_{n=0}^{\infty} \text{mod } A_n(x) = \infty$$

であることがわかる. そこで

$$A := \{A_n(x) \mid x \in K_f, n \geq 0\}$$

とおくと A は \mathbb{C} のある有界領域に含まれる disjoint な annulus の集まりであり,

$$X_\infty := \left\{ x \in \mathbb{C} \mid \sum_{x \in D_A, A \in A} \text{mod } A = \infty \right\} = K_f$$

が成り立つ. 従って Lemma 2.3.14 (1) (ii) より (注: 今の場合 Lemma 2.3.14 (1) (i) のようなことはおこらない), K_f は全不連結である. よって K_f は Cantor 集合となる. また Lemma 2.3.14 (2) より $|K_f| = 0$ が従う. 以上で定理の主張はすべて証明された. \square

参考文献

- [Be] A. F. Beardon, *Iteration of Rational Functions*, GTM 132, Springer-Verlag, 1991.
- [BH] B. Branner and J. H. Hubbard, The iteration of cubic polynomials, Part II: Patterns and parapatterns, *Acta Math.* **169** (1992), 229–325.
- [BKNvS] H. Bruin, G. Keller, T. Nowicki and S. van Strien, Wild Cantor attractors exist, *Ann. Math.* **143** (1996), 97–130.
- [Br] H. Brolin, Invariant sets under iteration of rational functions, *Ark. Mat.* **6** (1965), 103–144.
- [CG] L. Carleson and T. Gamelin, *Complex Dynamics*, Springer-Verlag, 1993.
- [DH1] A. Douady and J. H. Hubbard, Etude dynamique des polynômes complexes I & II, *Publ. Math. d'Orsay*, (1984-85).
- [DH2] A. Douady and J. H. Hubbard, On the dynamics of polynomial-like mappings, *Ann. Sci. École Norm. Sup. (4)* **18** (1985), 287–343.
- [F] P. Fatou, Sur les équations fonctionnelles, *Bull. Soc. Math. France*, **47** (1919), 161–271; **48** (1920), 33–94 and 208–314.
- [H] J. Hubbard, Local connectivity of Julia sets and bifurcation loci: three theorems by J.-C. Yoccoz, “*Topological Methods in Modern Mathematics*”, Publish or Perish, Houston (1992), 467–511 and 375–378.
- [J] G. Julia, Mémoires sur l’itération des fonctions rationnelles, *J. Math. Pures Appl. (7)*, **4** (1918), 47–245.
- [Le] O. Lehto, *Univalent Functions and Teichmüller Spaces*, GTM 109, Springer-Verlag, 1987.
- [LV] O. Lehto and K. I. Virtanen, *Quasiconformal Mappings in the Plane*, 2nd ed. Springer-Verlag, 1973.
- [Ly1] M. Lyubich, On the Lebesgue measure of the Julia set of a quadratic polynomial, Preprint SUNY Stony Brook, 1991/10, 1–8.

- [Ly2] M. Lyubich, Milnor's attractors, persistent recurrence and renormalization, "*Topological Methods in Modern Mathematics*", Publish or Perish, Houston (1992), 513–541.
- [Ly3] M. Lyubich, Dynamics of quadratic polynomials, I–II, *Acta Math.* **178** (1997), 185–297.
- [Mc] C. T. McMullen, *Complex Dynamics and Renormalization*, Ann. Math. stud., Princeton Univ. Press, 1994.
- [Mi1] J. Milnor, Dynamics in one complex variable, Introductory lectures, Preprint SUNY Stony Brook, 1990/5.
- [Mi2] J. Milnor, Local connectivity of Julia sets: Expository Lectures, Preprint SUNY Stony Brook, 1992/11, 1–46.
- [Mi3] J. Milnor, Periodic Orbits, External Rays and the Mandelbrot Set; An Expository Account (draft of 8-95), Preprint, 1–44.
- [NvS] T. Nowicki and S. van Strien, Polynomial maps with a Julia set of positive Lebesgue measure: Fibonacci maps, Preprint SUNY Stony Brook, 1994/3, 1–88.
- [MSS] R. Mañé, P. Sad and D. Sullivan, On the dynamics of rational maps, *Ann. Sci. Ec. Norm. Sup. 4e série*, **16** (1983), 193–217.
- [Pe1] C. L. Petersen, On the Pommerenke-Levin-Yoccoz inequality, *Erg. Th. & Dynam. Sys.* **13** (1993), 785–806.
- [Pe2] C. L. Petersen, Local connectivity of some Julia sets containing a circle with an irrational rotation, *Acta Math.* **177** (1996), 163–224.
- [Po] Ch. Pommerenke, *Boundary behavior of conformal maps*, Springer-Verlag, 1992.
- [Sl] Z. Ślodkowski, Holomorphic motions and polynomial hulls, *Proc. A.M.S.* **111** (1991), 347–355.
- [Su] D. Sullivan, Conformal dynamics, in *Geometric Dynamics*, Lecture Note in Math. **1007**, Springer-Verlag, (1983), 725–752.

索引

$A_n^c(x)$	109
$A_n^M(c_0)$	109
c_z	106
F_f^q	1
$G_c(z)$	49
J_c	2
J_f	1
$K(\omega_1)$	2, 119
K^*	65, 83
K_c	2
K_f	1
K_m	86
$p_c(z)$	1
$P_n(x)$	62
$P_n^c(c)$	107
$P_n^M(c)$	107
W_p^q	106
Y	88, 97
Y_k	114
Y_∞	114
Z	87, 94
Z_k	87, 94
Z_m	114
α -不動点	56
Angle(c, K_c)	57
Angle(z, K_c)	51
β -不動点	56
\hat{C}	7
∂_c	107
density(X, x_0)	14
density(X, Y)	14
dist(f, D_1)	15
$\mathbb{D}_r(x_0)$	14
ηf	15
Γ_0	61
Γ_n	62

Γ_n^M	106
mod A	33
$\mu(n)$	76
mul	58
μ^c	113
$\mu_x(n)$	79
N^*	70
ω -limit set	26
$\omega(z)$	26
Σ	70
Σ^c	113
Σ_x	78
\in	2
τ -関数	70, 78
$\tau(n)$	70
$\tau^{(c)}$	113
$\tau_x(n)$	78
θ_-	106
θ_+	106
$\varphi_c(z)$	49
A_k	87, 95
A_k^M	114
D	51
\mathcal{M}	2
M_p^q	106
P_n^q	62
P_n^M	106
$\mathcal{R}(\theta, K_c)$	50
$\mathcal{R}(\theta, \mathcal{M})$	57
$\mathcal{R}^c(\theta)$	105
$\mathcal{R}^M(\theta)$	105
$\frac{p}{q}$ -wake	106
admissible	33
annulus	32
—の内側	37

- 退化した—(degenerate—).....68
 非退化な—(non-degenerate—).....68
 APR.....4
 attracting periodic point.....4
 Axiom A.....7
 Axiom of recurrence.....71

 basin.....58
 Branner-Hubbard.....2, 75, 119
 Brolin.....1

 Carathéodory.....48
 center.....58
 immediate basin の—.....59
 Combinatorial Divergence Theorem.....77
 combinatorial rotation number.....54
 Comparison Theorem.....109
 completely invariant.....1
 conformal map.....15
 CP (combinatorial preimage).....84
 Cremer point.....5
 critical.....122

 density.....14
 —point.....14
 depth.....62
 distortion.....15
 Douady.....54
 —'s Landing Theorem.....54
 —'s principle.....56
 Douady-Hubbard.....4, 57, 59, 75
 doubling map.....51

 equi-potential curve.....48, 50
 essential.....36
 —curve.....33
 —な annulus.....36
 expanding.....7
 external angle.....48, 51, 57
 external ray.....48, 50, 57
 extremal length.....33

 Fatou.....1, 8
 Fatou 集合.....1, 7
 full.....47

 Green 関数.....47

 holomorphic motion.....109
 hyperbolic.....7, 9
 —component.....58
 —subset.....7

 immediate basin.....58
 intermittently recurrent.....84, 85
 IR (intermittently recurrent).....84
 irrationally indifferent periodic point.....5
 Isoperimetric inequality.....38

 Julia.....1
 Julia 集合.....1, 7

 Koebe.....24, 25
 —'s $\frac{1}{4}$ Theorem.....25
 —'s Distortion Theorem.....24

 landing point.....51
 Lebesgue's Density Theorem.....15
 locally connected.....3
 Lyubich.....4, 102

 Mandelbrot 集合.....2
 McMullen.....38, 119
 Milnor.....54
 MLC.....4
 modulus.....33
 Modulus-Area inequality.....38
 multiplier.....55
 —map.....58

 nest.....37
 —している.....37
 NIR.....4
 nonlinearity.....15
 n -piece.....62
 NR (non-recurrent).....84

 oblique curve.....89
 Optimal λ -Lemma.....110

 parabolic periodic point.....5
 partition.....61
 persistently recurrent.....84, 85

Petersen 5
 piece 62
 Poincaré metric 9
 polynomial-like mapping 2, 119
 potential 47
 PR (persistently recurrent) 84
 preperiodic 51
 proper 2, 56
 puzzle 61

 quadratic-like mapping 2
 quasi-regular 109
 K - — 109

 renormalizable 2
 infinitely— 2
 Riemann 球面 7
 root 58
 immediate basin の— 59

 Schwarz's Lemma 9
 Separation Lemma 65
 —in Parameter Space 108
 separation level 68
 Ślodkowski 110

 univalent 24

 weight function 76, 79

 Yoccoz 4, 54, 69, 75, 109
 —inequality 55

 完全不変 (completely invariant) 1
 吸引周期点 (attracting periodic point) 4
 吸引領域 (basin) 58
 局所連結 (locally connected) 3
 許容的 (admissible) 33
 くりこみ可能 (renormalizable) 2
 無限回—(infinitely—) 2

 宍倉 4, 74, 75, 119
 周期 2
 くりこみの— 2
 双曲成分の— 58
 充填 Julia 集合 (filled-in Julia set) 1

前周期的 (preperiodic) 51
 双曲型 (hyperbolic) 9
 —Riemann 面 8, 9
 双曲成分 (hyperbolic component) 58
 双曲的 (hyperbolic) 7
 —部分集合 (—subset) 7

 単葉 (univalent) 24
 中間値の定理 75
 等角写像 (conformal map) 15
 等周不等式 (Isoperimetric inequality) 38

 放物型周期点 (parabolic periodic point) 5

 密度 (density) 14
 無理的中立周期点 (irrationally indifferent
 periodic point) 5

 歪み (distortion) 15

 領域 32